

強引ナンパ男に
空手部女子○生がやりすぎキ○タマ制裁



リメイク版

玉子王子 著

一章 ナンパに怯えた女の子が不登校に……これは金的リンチでケジメしかない！

うさぎ女子校最寄り駅の近くの路地。

一時は入れ食いと噂が立ち、ナンパ師が大勢いた界限だ——といっても女子校周辺におっさんたちが女子校生に声をかけて回ることは許されないの、高校やギリギリ大学生ぐらいの若い者たちに限られるが。

だが今はそれほどではない。

礼二は、手鏡で服装をチェックする。

野性味あるエラの張った顔。

服装はシャツにジーパンで、じゃらじゃらシルバーアクセサリなどをつけている。

一見して、まじめな学生には見えない。

とはいえ、刺青の入った腕などを見せつけるほどのこともない。普通の格好をすれば普通の学生で済むぐらい。

バランスが大事だった。

——弱そうに見えれば、ほかのナンパ師に追い出される。暴力的に見えすぎると女に引かれる。いい塩梅狙わないとな。

男が増えれば獲物が減る。

そのためかつてこの辺りではナンパ師同士の潰し合いが起きた。

結果、暴力的な者たちが残ることになった。

強いというより、強そうに振る舞い、大人しい者につらく当たれるものが残った。

鏡を見ながら歩く礼二。

そろそろ下校時間。

似たようなナンパ師が姿を見せ始める。

みな、基本暴力的な感じ。

一人など、すべての指にごつい指輪をつけ、手の甲に細かい刺青をしていた。

年齢は、大学生ぐらいだが大学に行っていそうな感じはしない。

というか、どこにも行けそうな気はしない。人生袋小路、という感じだ。

土俵入りのように両手を広げて歩く。

ナンパ師がぶつかりそうになり、慌てて避ける。

見ていて笑いそうになる礼二。

——いやいや！ そりゃそういういかにもって感じの格好してれば、中身ヘタレでも喧嘩売られず、強そうな顔はできるよ？ それなら追い出されないよ？ でもそれじゃ肝心の女にドン引きされるじゃん？ 意味なくね？

バンダナに、サングラスまでしているのだ。

——ありゃ、反社というより、腰抜けなのをごまかすために SNS なんかで強そうな男のアイコン使ってる奴と同じ。喧嘩売られないように防衛線引いてるわけよ。まあそれは効果あるだろうけど、

問題はそういう「反社系アイコン」使ってたら喧嘩売る奴も減るけど仲良くしたがる奴も減る……そいつにアクセスするコスト自体が増えるってことだな。あいつは喧嘩も売られないが、ナンパもうまくいかない。ここにいる意味ねえーよ。うまくいってるとこ見たことねーし。

ぼつぼつ、女子校生らが歩いてくる。

目のついた子に話しかける。

あまり付きまとうのも意味がないので、ある程度話したら切り上げる。

さほどうまくいかない。

心なしか、普段よりうまくいかない気がする。

まあ、それならそれでいい。

実は彼女持ちの礼二である。当然、童貞ではない。

——そりゃそうだよ！ ナンパ師が童貞とか、おかしいもん！ 彼女がいるけど、遊びでナンパもしてる……真のモテる男、それが俺なんだ！

リメイク前は童貞だったが、今回はヤリチンの礼二だった。

と、バンダナ男。

礼二がある程度歩いて脈がないなら切り上げるのと違い、その男はしつこく女子校生に付きまとう。前に回り、ついには「無視するのか」と怒鳴りさえする。

サングラスの下の目元。

目と目の間は普通より狭い。

神経質そうな顔であり、実際に神経質だった。

弱い心を隠すために刺青、バンダナ、強そうな格好ととにかく鎧をまといまくっている。

そして自分より弱そうな女を怒鳴ると、割とどうしようもない男。

委員長っぽい女の子とちょっとうまく話していた礼二が頬を歪める。

——おいおい、あぶねえなあいつ。あんなのが増えてきたら、俺ら善良なナンパ師まで規制されちゃうよ。仕方ねえな。

切り上げ、バンダナに近づく。

「芝、うまくいってるか？」

「行かねえっ！」

怒鳴り、地面を蹴とばす。

人間を傷付けない範囲で、暴力的にふるまうことで周囲を威嚇する。

そんな計算あつての行動なのか何なのか。

「あんまりしつこくやるなよ。この前も泣かせてただろ。うまい事丸め込んだほうが得じゃんかよ」

一週間ほど前か。

バンダナが似たようなことをして、女の子を泣かせていた。

思い出してみると、礼二はその子をこの一週間見ていない。

先ほどまで芝が絡んでいた女子が、礼二に頭を下げて走り去る。

——これ、俺のポイントかな？

ブツブツと、何か言っている芝。

実際に殴り掛かっては来ない。

まあ殴り掛かる展開ではないが。

——こいつが上っ面だけのチンカスだってのはわかってる。でも、そう思っていない奴から見れば、俺はこういうのと話せる特別な奴に見えるわけだ。あは、こいつが暴力的にふるまうことで、こいつはほとんど得してないが、そんなこいつと付き合える俺はこいつの威を借りてちょっと得できる。これはおいしい話だよな。まあその代わり、あんまりにも無茶は止めてやるよ。というか、ナンバ師全体が損するからだが……

と、気づく。

目線の端に、小柄な少女が立っているのに。

やや鼻が大きく、黒目の大きなクリっとした目。

青い髪はショートカット、全体的にみると、小柄であるのにどこか温和な大型犬を思わせる雰囲気を持っていた。

「海子、こいつだけど……大丈夫かな？」

「大丈夫、まかせるですう」

少女の横には、背では彼女よりかなり大きい、ほかのものと比べると平均身長であることがわかる少女が二人ほど立って居る。

不安げな顔だったが、海子と呼んだその小柄な少女が胸を叩くとほっと安堵した顔を見せる。

その華奢な少女に隠れるようにして、バンダナを覗む。

カッ、と顔を赤らめるバンダナ。

「なんだお前ら！」

「〇〇という女の子、知ってるですよね？」

「しらねーよ！」

——何キレてんだこいつ……いや、睨まれてムカつくのかもだが……

体こそ大きい、余裕の全くない小型犬を思わせるバンダナ。

海子のほうは、怒鳴られてもニコニコしている。

「こいつだよ、こいつに強引に誘われたせいで……あの子もう一週間も学校来てない」

眉を顰める礼二。

——あちゃ、やっちゃったなあ。まあ不登校になるような奴なんか知ったこっちゃねーけど、問題化されたら「ナンバ禁止」の条例？ でもできて、見回りでもされるかもしれねえ。そんなことになったら、このデカイ女子校近くの駅っていうナンパの聖地もお終いだぞ。

「ああ、一週間前のあのブスカー！ 学校来なくなった？ 不登校になる奴なんてどこ行っても負け犬なんだよ、俺がやらなくてもおんなじだった！」

唾を飛ばし、叫ぶ。

ため息が出る礼二。

「俺もそう思うけど、口に出すなよ」

「それじゃ、お二人さん……ちょっと付き合っしてほしいですう」

「おらっ！ キ〇タマついてるなら逃げないよな！」

「なんだとこの腐れマ〇コが！」

「喧嘩はやめるですう。というか、そういうこと言っちゃダメですよお。こういうせこいことしてる人に、ちゃんとおキンキンがついてるかなんてわからないですう。タマタマがなかったら、そういうこと言うのはかわいそうですう」

仲裁のふりをして、挑発。



震えるバンダナ。

「じょ、上等だよ。なあ礼二」

「ん、ああ……」

——俺は関係ないが……ここで放り出して帰ったらこいつうるさそうだからな……所詮相手は女だ。三人たって別に、どうってことねえよな。

「わかったよ。そこまで言うなら付き合っやる」

駅を離れ、人気のない場所へ向かう。

礼二も来たことがある辺りだ。

駅の近くだが、不思議と寂れた辺りで、廃工場や空き地がたくさんある。

住宅地ではないので、余計寂しい感じだ。

ナンパがものすごくうまくいったら、しけこめるちょうどいい死角の空き地があり、ナンパ師の抗争時代にはそこでグループ同士で殴り合うことも結構あった。

バンダナは、不思議とそういう時には雲隠れしていたものだ。

礼二は喧嘩でも、しけこみでも、両方この辺を使ったことがあった。

と、ふと気づく。

彼氏だのなんだのを集めて、待ち伏せしているのではないかと。

喉の奥が急に乾く。股間がギュッと引き締まる。

——うわ、ヤベ。女ごときと思ったけど、だからこそ男連れてきてる可能性は高いぞ。

唾をのむ。ザコで腰抜けのバンダナを見る。

先にずんずん進む。

たぶん……というかもうほぼ九九パーセントクソ弱いだろうバンダナ。しかし、見た目だけはチンピラっぽく強そうだ。

女子たちの彼氏が待ち伏せている場合、戦力的にはバンダナは全く話にならないが、怖がらずにはったりで怯ませようとするなら、うまくいく可能性はある。

——ってというか、待ち伏せが居る場合、そのラインでしか助からねえ。俺も普通だし、バンダナはカッコだけのクソザコ野郎だから。いや、喧嘩の時は雲隠れだからわかんねーけど、強いなら出てくんだろ。

強くても怪我したらつまらないと思う……という事はない。この世界はナノテクノロジーが発達し、薬が潰れようが、頭が半分砕けようが薬一粒で治る。

足でも折って引きずるようになつたりしたらつまらない……などという事は考える必要がない。足が吹っ飛んでも、コンビニで売っている薬一粒ですぐ治る。

だから出て当然の喧嘩に出ないのは「ビビリ、弱い」以外の理由は考えにくい。

穏やかな平和主義者ならまだしも、チンピラぶってそれでは腰抜けと見なすしかないだろう。

それでも、相手がそれを知らないならカッコだけでごまかせる可能性はある。



曲がり角をぬけ、空き地に出る。

別に、誰も待っていない。

男は。

制服の女子校生が三〇人。

女の声が聞こえていたので彼女らの存在はわかっていた。

が、男が一人もいないことに礼二は拍子抜けする。

——なんだ、女ばかり……

「なんだこの野郎、お前らなんだ！」

体が大きいだけの子犬が吠える。

遥かに小さい大型犬を少女らが見る。

不安げだ、しかし、軽く海子が目くばせすれば一様にうなづいたり、目に力をともらせる。

——すごい人望というか……信頼？ 俺らの人生には縁がないもんだな……

「おうおう、俺を誰だと思ってんだ！」

「芝さん、ですよねえ。しってるですう。うちの部員の同級生の女の子を、不登校にした」

「不登校になるようなザコは一生ザコなんだよ！」

肩をすくめる海子。

周りの少女らが目を吊り上げ、怒鳴る。

「ざけんじゃねーぞ腐れキ〇タマが！」

「女の子いじめてそれでも男？ チ○ポついてんの？」

「ついてねーんじゃねえの？ ついてねーんじゃねえのおチン○ン、そんな顔だよこいつ」

「タ○キンぶら下げてるなら見せてみるよコラ！」

いきなり下腹部に言及しまくる少女らに、顔を赤らめるバンダナ。

「お、お前ら何を……お前らこそついてない……」

「あー！ 玉無し野郎は黙れだって！」

「女性蔑視発言！」

「これはキャン玉を潰すしかない。まあ、ついてたらの話だけど」

「私ら、うさぎ女子校の空手部員だから……キンキン蹴りには慣れてるのよー。男と戦うの想定して、毎日お互いの股間狙いあってるからねえ」



「大丈夫大丈夫、再生薬はあるからねー。一瞬で治るよ。大事な大事な、タマタマが潰れても。キ・○・タ・マ、潰れても」

「タ○キン再生に一日かかる時代もあったねえ」

「タマタマはすぐ再生するからいくら潰してもいい……いい時代になったものだ」

汗が流れるのを感じる礼二。

——え、え？ ちょっとまって……まってよ、え？ こいつらまさか……俺らと喧嘩する気？ 三○対二とかずる過ぎないか？ いくら女相手でも……っていうか……こいつら、どう考えてもおもっ

くそ、狙ってくる気だよな？

膝を締める。

太ももの間にゆったりとぶら下がる一番大事な臓器。男にとって命以上の部分。

二粒の宝物、睾丸。

そこをやられた痛みは女には一生わからない、しかも、今の時代は玉が簡単に再生するので「もし潰してしまったら」という恐怖もない。

女は、遠慮なく玉を蹴ってくる。

自分についていないので、痛みがわからないから。

自分はどういう展開になっても、絶対百パーセント蹴り返されないから。

——いや、蹴り返されるけど……

ちらりと、少女らの一番前に立つ、小さな大型犬、青い髪の小柄な少女を見る。

その、スカートに包まれた股間を。

フラットな三角地帯。太もも太もも、股間、それが織りなす美しいY字帯。

「ん……なに見てるですかあ？」

ビク、と頬を引きつらせる礼二。

それに対し、大型犬が子供のいたずらに怒ったりしないような、余裕に満ちた柔らかな反応を見せる海子。

スカートの前を撫でる。

「ここ、気になるですか？ これから自分のここに起こること、こういう綺麗なお股なら恐れる必要はないのに、羨ましいですう、ですう。と、いいたいですか？ 気持ちはよーくわかるですう。男の子のここってなんか、明らかに邪魔ですう」

「あ、わかるわかる！ 男のここって……足と足の間、よりによって急所ぶら下げるとか……おかしいでしょ？ 箸の間になんか入れる？ 使いにくいでしょ」

男の股間をネタに話し出す女たち。

なんとなく恥ずかしく、股間がギュッと引き締まる礼二。

と、その妙な雰囲気をおちぎるバンダナ。

「女の股なんざ出来損ないだ！ それよりお前ら、やんのかこら！」

笑っていた女たちがギョッとなる。

と、海子が前が出る。

「それじゃ、私が相手するですう」

「上等だよチビがあ……ぶん殴ってやるぜ！」

ごてごてと指輪を付けた拳を握り、ボクシング風の構えをする。

あくまでそれっぽいだけだ。

比べて、海子。

「頑張れ海子！」

「副主将やっちゃえ！ おき〇タマ狙って！」

「タ〇キン潰しちゃえ！ 二個とも潰しちゃえ！」

「再生薬はいっぱいあるから、ガチ去勢OKですから！ 遠慮なくやっちゃいましょう！」

「そうそう、私らどうせ蹴り返されないから、タ○キンついてないからへっちゃら！」

女子たちの歓声の中、海子はごく自然体。

自然体に立っているが、ある程度喧嘩してきた礼二には殴り掛かれない何かを感じさせる。

——そうだ、空手部員だとか言ってた……その副主将……こいつ、やるぞ。体格からは考えられないほど……というか、素早くキ○タマ蹴られたら体格もクソもねえ。女は毒針を持ってる、金的狙いという、一方的に使える毒針を……

膝を心なしか締める。

と、少女らの会話が聞こえる。

「あっちの奴どうする？」

「というより、あっちの奴なんなん？ 狙いはバンダナっしょ？」

「流れて付いてきただけの、他人じゃない？ ただのナンパ師で、顔は知ってる程度の」

「そんなわけないよ。バンダナの知り合いみたいだよ」

「友達らしい」

「っていうか、親友だって」

「生きるも死ぬも一緒らしいよ」

「それじゃ油断なく見ておかないとね」

ごくん、と喉を鳴らす。

汗が浮いてくる。

——おいおいマジか、俺いつあいつと一緒に死ぬ予定になったんだ？ 顔知ってる程度とまでは言わないが、せいぜい知り合いだぞ……でも、そんな関係でついてくるのは確かにおかしいし……そう思われても仕方ねえのか？

チラ、と少女を見る。

近づいてきているのだ。どうも、バンダナと海子と、礼二を遠巻きにしようとしている感じだ。

「あら、なに？」

「こっちも始めちゃう？」

「やだ、男の人と喧嘩なんてできないよ！」

「私も！ でも……確か男の人には……特有の急所があったような？」

「あ、私も聞いたことある！」

ニヤニヤしながら、少女らが股間をガン見してくる。

聞いたことあるどころではなく、蹴り慣れているとしか思えない空手少女たち。

というか、さっき男のそこを狙うのを想定して、お互い蹴りあっているといっていた。

「タマタマだよ、タマタマ」

「そうそう、おキンキン、おキ○タマ」

「男の急所。うちは女子校だからあんまり縁ないけど、共学の女子空手部とかだと、生意気なクラスメイトの男子とか呼び出して金的蹴りまくりだっけさ」

「ぎゃははは！ 鍛えてる女の子が、普通の男の子のそこ集中攻撃とかハンデデカすぎ！」

「はぐっ！ とかいってさ、一発らしいよ」

「ヤリチン気取りの生意気な野郎でも、金的蹴ってアソコ丸出しにして写真撮ったら一発でおとなしくなるって」

「わー、面白そう、私もやりたーい！」

「あは、もうすぐすぐやれんじゃね？」

顔を赤らめ、膝を締める。思わず股間を抑える。

抑えるや、少女らが爆笑する。

「あ、見てみて！」

「まだ何にもしてないのに金的防御だ！」

「やだ、だっせー、女の子相手に金的防御？ まだ喧嘩も始まってないのにおキ○タマ保護？ それでもチ○ポついてんの？」

「あとでばっちり確かめてあげようね」

唇を噛み、真っ赤な顔でバンダナを見る礼二。

——頼む、勝ってくれ！

長く話しているようだが、一瞬のことである。

向き合うバンダナと海子。

振りかぶって突進するバンダナ。

右手を引いて、思いきり顔面を狙う。全くの素人の動き。

海子は足さばきで軽くかわして、前を駆け抜けるバンダナの股間をパン、と軽く掌で叩く。

「はぐっ！」

「おーっと！ 金的！ いきなりの金的です！ でも軽い、軽いかすらせただけ！ まずはご挨拶だ！ おキンキンに女の子様からの優しい挨拶だー！」

ギョロロとした意志の強そうな目つきの少女がマイクを持っているかのように叫ぶ。別に持っていないので、実況役として配置されたのではなく勝手に言っているだけのようだ。

「男の子が一番守るべきおキ○タマを真っ先にやられたバンダナ！ 悲惨！ 男特有の痛み！ 全然わからないけど、たぶん痛い、これは痛い！ 多分！ あ、足がもつれた！ 倒れる、顔面から！」

突進中だが、腰を引くという無茶な行動をとってあっさり足をもつれさせ、勢いのままに地面に叩きつけられるバンダナ。

顔面から倒れるが、サングラスは勢いよく倒れたために外れ、割れたりもしない。

鼻血を出しながら、叫ぶ。

「ふぐおおおおお！ ひ、卑怯者オオオオ！」

「ぎゃははは！ 顔面打ったのに、股間押さえてる！」

「どう見ても副主将、思いっきり軽く打ったのに！」

指さし、手を叩いて唾を飛ばす少女たち。

「タマタマ痛いんだ！ あんなのでも！」

「急所痛い？ 男の急所痛い？」

「油断しないで副主将！ 半分以上演技ですよ演技！ そんなに痛いわけないもん！ 同情買ってタマタマ狙われないようにするためのブラフですよ！」

棒立ちで仲間をせせら笑う少女らを見ているしかない礼二。

仲間と、少女らを交互に見る。

と、海子と目が合う。

にこっと笑うと、股間を押さえ、尻をフリフリと大げさに振る。

「男の子だから、こうなるのは仕方ないです。はぐうう、タマタマがあああ！ ですう」

「女ならよかったのにねー、バンダナのおっさん」

高校生よりちょっと年上程度でおっさんはないだろう。

それへの怒りからか、顔を真っ赤にして何とか立ち上がるバンダナ。

「お、お前……ふざけんな、こんな……あっ！」

何とかバランスをとって立ち上がるため、開かれていた足。

その間、太ももの内側を小柄な少女の爪先がすっと擦るように跳ね上がる。

「はぐっ！」

「おーっと、金的……ではありません！ 寸止め！ さすが古流空手の使い手です！ 寸止めはお手の物！ そして急所狙いもお手の物なので、油断してると辜丸潰されちゃいますよバンダナのおっさん！」



「そうなる前に蹴るのよ、副主将の辜丸を蹴るのよ！」

「さっき叩かれた分、キ○タマパンチだ！」

「あ、でも……ぎゃははは！ 海子にはついてないから無理だわ！ おキ○タマ！」

海子の爪先蹴り。

素人にありがちな、止めようとしてちょっと当たってしまうという事もない。

本当にギリギリで停止している。つま先立ちのバンダナ。

蹴りが止まった後でつま先立ちになって、それを追いかけるように海子はすっと足をさらにちょっと上げた。

それで、身動き取れない。

叫ぶギョロ目の実況少女。

「どうしたバンダナ！ どうしたバンダナ！ 別に女の子様の足には、睾丸を溶かす特殊効果とかは無いのよ！ 触れてもいいのよ！ 今なら大丈夫、止まってるから」

「ひっ、ひっ、わ、わかってる……」

「あ、警告ですよ。動いたら睾丸潰すですよ。睾丸コーガン、コ・ウ・ガ・ン、グチャっといくですよ。去勢志願なら、動くといいですよ。じっくりたっぷり、コーガン潰しをプレゼント、女の子の世界にようこそですよ」

「つ、潰すとか、はったりだ……」

「男の子の大事なものなら五歳から潰してるですよ」

金城海子の家兼道場ではオス豚を飼っている。

去勢しておらず、食べる直前に弟子が睾丸を潰して食う——それが男にはきつすぎ、ほぼ女性の弟子しかいない、**女性は慣れると笑って潰せる。**

それでは管理をしやすくしたり、男性ホルモンの臭いが肉に出ないようにするという去勢の効果が全くないが、食べるのはついでなので気にしない。

その**豚玉潰し**を五歳から頻繁にやってきた海子にとって、睾丸を潰すことへの心理的な抵抗感は皆無だ。まあ、女性全般割とそんな感じともいえるが。

爪先立ちのバンダナ。

「玉が、玉が……叩きやがって！ ぶっ殺す、何が動いたら玉潰すだ……もう一回蹴るには足を下げないと、その前に踏み込んでぶん殴る。顔面ぐちゃぐちゃにしてやる！」

「そういうことは心の中で考えたほうがいいですよ」

いわれ、目を血走らせるバンダナ。

「お、お前……わかってんのか？ 俺がどういう人間か？」

「どうもこうも、人生袋小路の去勢豚っぽい感じですよ。体格だけはいいけど、それだけ。さっき叩いた感じじゃ……」

「おおおおっ！」

爪先立った足をつけ、掴みかかろうとする。

話の途中で、奇襲のつもりだった。

しかし、海子の目には動こうとする目つきや、筋肉の動き、重心の傾きなどではっきりと、「これから動きます」といわれているかのように伝わってきていた。

反撃してこない人間しか殴れないバンダナには想像もつかない境地である。

境地といっても、別にまだまだ達人でもなんでもないが。

とにかく、海子は余裕をもって反応する。

膝の力を抜く、日本の古武術から取り入れた「抜重」と呼ばれる身体操作で力をためる動作をせず、一瞬で動き始める。

倒れるように前に進み、抱き着く。

「あっ」

ブン、と指輪で固められた拳が宙を舞う。

驚くのは一瞬。顔を緩める。

食いつくように両手で小柄な海子の肩をつかむバンダナ。

「はははは！ 力で敵うと……」

押そうとするバンダナ。

グチョ、と小ぶりの膝を柔らかい肉に減り込ませる海子。

「ちょおおおうんごおおおお！」

笑いから絶望への転落。

目を剥くバンダナ。嘔き出し、唾を飛ばす女たち。

「ぎゃははは！」

「おっしゃー！ タ○キン潰した！」

響き渡るバンダナの絶叫と見ている少女らの爆笑、そして実況。

「やった！ 海子金的！ 容赦なく膝蹴り、男子の急所に膝蹴り！ まだだ、まだいける！ バンダナはまだ戦える！ だっておキ○タマは二個セット！ 一個潰れててもまだ一個残ってる！ おおおおおお！ 膝蹴り、膝蹴り、海子膝蹴り！ おキ○タマを集中的に狙う、容赦なき金的集中攻撃！ 女は怖い、女は怖い、キ○タマがないから痛みもわからず、容赦がない……おっと、蹴り返す、バンダナ蹴り返す！ ボスっと当たる、海子のキンキン直撃、互角、互角の膝金蹴りの応酬！ でもおかしい、おかしい、不思議だ、海子にダメージが見られない！ 蹴る、蹴り返す、蹴る、蹴り返す！ バンダナは「おご」「はぐ」と情けない声を上げるのに、海子は平気だ、なんで、なんで平気なんだ！？ どういう事だってばよ！？ ああああ、そうか！ 女の子である海子には、お、お、おキ○タマがついてない！ だから股間蹴りは意味がないのか！ なんてことだ！」

「やれやれ！」

「タ○キン蹴り潰せ！」

「どうしたバンダナ、それでも男か！ もっと蹴り返せこら！」

「はぎっ、おごっ、はぐっ、ずる、ずるい、そんな、同じことしてるのに……」

「あん、いたい、痛いですうう、この！ 睾丸潰れるろですう！」

密着状態では、まともに膝蹴りなど打てない。

足を前に出す感じで、わずかに膝をぶつけるだけだ。

初めの一撃以外、海子はさほど力も入れず、からかうように膝蹴り。

一方、バンダナは力が入らないなりに必死で蹴りに行っている。

同じように力が入らない状況の中でも、バンダナのほうが力はあるし必死でもある。

が、ダメージは圧倒的にバンダナの側が大きかった。

「やっちゃえやっちゃえ！ 金的ありの膝蹴りの応酬で男が女に勝てるわけがないよ！」

盛り上がる女子たち。

いつの間にか、遠巻きに囲んで歓声を上げている。

海子とバンダナ、そして少し離れた所に立つ礼二を楕円形に囲んでいる。

無意識に逃げ道を探すように少女らを見回す礼二。

——俺まで囲むなよ！ 畜生、芝がやられてる隙に逃げようと思ってたのに……こうなったら、何とかあいつが勝って……いや、ここから勝てるわけねえ。どうしたらいいんだ……

「ひぐうううっ！ もうやだあああ！」

ボスボスと、軽い膝蹴りを受けながらも、半泣きで肩をつかみ、押すバンダナ。ダメージ覚悟で距

離をとり、膝蹴りから逃れようとした。

その力に全く逆らわず、押される海子。

いや、それ以上に下がる。

下がり、つま先。

細い爪先が、バランスをとるために足を開いて立つバンダナの太ももの間をすり抜ける。

その動きが、バンダナの目にはスローモーションに見えた。

「ちょま、やだっ！ つま先が来る、あ、脛、膝、あ太もも……太ももの真ん中……あ、あ、あああああああ！」

爪先が太ももの間をすりと抜ける、一瞬の時間を脳内で引き延ばすバンダナ。

もちろん、その時間の中で動くことはできない。

叫んでいるしかない。

文章にすれば意味が分かるが、聞いている人間には早口過ぎてよくわからない絶叫。

ちょますねふともああああ！ というような感じにしか周りには聞こえていない絶叫。

ただ絶叫し、金的の恐怖に震えるしかない時間。

その一瞬後。

グチョ、と海子の爪先がバンダナの股間を押し潰す。

「おぐっ！ おおおお！」

「金的金的、またもきんで一き！ 海子爪先、海子爪先、女の子の爪先が男の一番弱いところに直撃！ 股間を押えるバンダナ、と……何という事だ！ またも抱き着く海子、抱き着くや相手の手ごと膝金！ バンダナ泣きそう、もうやめて！ 玉だけはやめて！ そんな顔をしています、でも止めない！ 女の子様はやめない、タ〇キン蹴りをやめない、だって本当にどのぐらい痛いかわからないから、加減とかできないからね！ これはやむなし！ 金潰しはやむなし！ 膝蹴り、膝蹴り、海子の膝蹴り、泣きそうな顔で蹴り返すバンダナ！ またも始まる膝金の応酬！ ただし、女の子様にはタ〇キンがないので、やってることは同じでもダメージは段違いです！」

「ひiiiiiii！ はなれろおおお！」

密着状態では強く蹴れない。ボスボスと膝蹴りというより膝を股間にぶつけられつつ、涎を垂らし、海子の肩をつかみ、再び突き放す。

力で押し合っても勝てないので、押されるままに離れる海子。

グチョ、と爪先蹴り。

金的のダメージで立っているには足を開かねばならない、突き放すには両手で押さねばならない、となれば股間を守ることは不可能。

「はぐんっ！ あ、ちょ」

股間を蹴られれば、腰を引いて股間を抑えるしかない、それが男の本能。

それに合わせ、再び踏み込んで膝金。

ごりゅっ、と手ごと蹴り込む。

そして抱きつき、手の上から膝をぶつける軽い膝金地獄に突入。

「うぐううううっ、ちょ、これ……ハメ技、ハメ技……」

格闘ゲームなどで、逃げ場がない攻撃を続ける感じのことをハメ技と呼ぶ。

「ちょっとあれ、逃げ場なくない？」

「そんな、実戦でハメ技って難しいよ」

盛り上がる女子たちの中で、震えているしかない礼二。

——なんだあの状況……どうすれば……とりあえず、あのままなら、手の上から膝ぶつけられる程度だから、衝撃が玉に伝わるだけで、それほどじゃないはず……いや、でも密着する時点での膝蹴りや、離れての爪先蹴りはもろだ、あれでダメージ受けたところに、衝撃でもきついか……

「あiiiiiiiiii！」

「おーっと！ 再び突き放すバンダナ！ 押されると、下がる海子！」

「はぐっ！」

「ぎゃははは！ また爪先金蹴りです！ そして防御するオッサン、突き放す手が離れたところを踏み込んで膝金蹴りの海子、そして抱き着いて膝蹴り、膝蹴り！ わめいて突き放すオッサン！ その動きのままに離れてつま先金蹴り！ そしてまたも防御するオッサンに膝金、抱き着いてさらに膝蹴り！」

「あひiiiiiiiiii！ やめてくれ、やめてくれ……あああああ！」

爆笑の渦。

金蹴りから逃れるには突き放すしかないが、放したら放したで距離をとって爪先が来る。金蹴りを食らえば股間を押さえざるを得ない。それで突き放す動きがキャンセルされ、踏み込まれて手ごと膝金蹴りを思いきりくらい、抱き着かれて膝をぶつけるような玉蹴りを連続で食らう。

それに耐え兼ね、多少玉蹴りを受けても突き放そうとすればまた距離を取られてつま先金蹴り。

地獄の金的ループ。

「ひ、ひ、ひでえ、ひでえ……」

「あれもうタ○キンが潰れる以外に逃れる道はないでしょう」

「金的煉獄」

「というよりバンダナのオッサンに選択肢の幅無さすぎでしょ……頭突きとか、片手で防御して肘打ちとか、あの体勢からでもなんかあるはずなのに」

「これは煉獄というよりも相手が弱すぎてループしちゃうだけね」

「っていうか煉獄って？」

「喧嘩○業って漫画に出てくる連続技」

「ああああああああ！ 許してくださいiiiiiiイイイイ！」

「ぎゃはははは！ 来た来た！ あんな反社っぽいオッサンもタマタマ蹴られたらこんな小さな女の子に「許してください」なのねえ」

「玉ってマジで弱点」

「おらおら、謝ってすむか！ ザコキ○タマ潰れるまで終わらねーんだよ！」

「ふぎiiiiii！」

鼻水と涙。

突き放せばさらに強力な爪先金蹴りと膝金蹴りが来る。だが、そのままだと膝をぶつけて防御する手ごと睾丸を削り潰すような攻撃を受け続けることになる。

目をぎらつかせ、またも突き放しに出るバンダナ。

力の差は歴然で、押されれば離れるしかない。

「また押した！」

「どうせ爪先でタマタマ蹴りなのに！」

またも爪先蹴りか、と思いきや、突き飛ばすと同時にバンダナは腰をひねっていた。急所を左側に向け、爪先蹴りをかかわす形だ。

「おっ！」

思わず叫ぶ礼二。

さすがに、何度も何度も同じ流れで玉蹴りを食らえば対応するに決まっている。

むしろ、「やっとか」という思いがあるほどだ。

爪先蹴りさえ避ければ、そのままさらに下がることもできる。

爪先蹴りを食らって動きが止まったところに、膝蹴りが来る流れだったのだから。

腰をひねる、という単純な動作で仕切り直しか。

が、海子はその動きを読んでいた。

右手による鉤突き、フックを放つ。右鉤突きは当然、左側面を打つ形になる。

ゴリっ、と爪先蹴りを避けようと左に向いていた腰のど真ん中、男の膨らみをやや下から跳ね上げるような軌道でフックがめり込む。

「ちょおおおおお！」

腰をひねった形で、そこを思わず引いてバランスを崩すバンダナ。

海子はそれにもスムーズに合わせる。

倒れるのと合わせて横に踏み込み、脇を締めて小さなバランスのいい動きで踵を踏み下ろす。

何処にか、は言うまでもなかった。

男を攻撃するのに、もっとも効率がいい部分。

特に女からやるなら、同じ反撃を食らわないのでおいしい部分。

男の急所、睾丸を的確に狙い、踵を叩き込む。

「おぐあああああああああああああああああああああ！」

ほとんど気絶していたバンダナが、股間を踏み潰されるや目を見開き、唾を飛ばして体をビクンと強く痙攣させる。

「おーっと！ 決まった、決まってしまったー！ 金的踏み潰し！ 金的踏み潰しです！ 普通に踏んでも潰れてしまうかもしれない男の急所、おキ〇タマを踏み潰す形で蹴る！ 体重を掛けて踏み蹴る！ これはチン〇ンまで潰れる勢いか！ 泡を吹くバンダナ、泡を吹くバンダナ！ もはやこれは玉無しになったと判断するしかありません！ 玉無し、玉無しです！ 男のくせに、おキ〇タマがないという悲惨な状態！ 男でありながらエッチ不能というファンタジーな存在、それが玉無し男！ みんな、彼がおキ〇タマを失った玉無し男であることは内緒にしてあげようね！ かわいそうだから！ やーいキン無し、金なーし！ とか言っていじめちゃだめだよ！」

死んだように……というより本当に死んでいるのではないかと思うような青黒い顔でぐったりするバンダナ。ただ、白目を剥いて痙攣し、泡を吹いているので一様死んではない事はわかる。

チラ、と周りを見る礼二。

遠巻きにしていた少女たち。

礼二が逃げないように数人は常に目を光らせていた。

が、今は違う。

皆、バンダナのほうを向いていた。

皆目を輝かせ、頬を赤らめている。

デート中に、女の子がそういう顔をしてくれたら「もうさっさとホテルに行こう」と思うだろう。

性的興奮としか判断できない顔だ。

恐怖である。

——冗談じゃねえ、冗談じゃねえ、なんでここであんな雌の顔してんだ！？ き、キ〇タマ潰される男見て、欲情？ 嘘だ……いや、ここ、うさぎ県の女どもなら、ありうる……

世界一ドS女子の割合が多いと噂される県だ。

ドSといっても色々あるが、ここのうさぎ県で多いドSは金責め型である。

普段はごく普通の常識的な女性の顔をしているくせに、金責めが目の前で展開されると本性を現してくるものが結構な割合でいる。

「いやああ、泡吹いてる……」

「おき〇タマ、マジで潰れたんだ、すごい痛そう……ああ」

「潰しちゃったんだ、副主将。男の子の大事な物、潰しちゃったんだ」

「あ、残身。ビジネスライクだよ、副主将は」

「そりゃ、主将みたいに**「趣味辜丸潰し」**のキ印じゃないからね」

「あの方はヤベえわ」

「知ってる？ エッチのたびに彼氏さんのタマタマ潰してるって話」

「それはもう主将がどうってことじゃなくて、彼氏さんがドMってだけでしょ」

「黙って動かなきゃ超巨乳で背も高くて、スーパーモデルみたいなのに……」

「ちょ、「黙って動かなきゃ」って！ 完全にデザインにしか価値ねーって言ってるのと同じじゃん！」

げらげらと、楽しそうな少女たち。

今さっき男性器を踏み潰されて去勢された男を見下ろしながら、雌穴に蜜を溢れさせる。

「女でよかったわ。見て、あの悲惨な姿。アレで男として終わってるんだよ。女として終わるにはどのぐらい攻撃されなきゃダメかな？ 耐久性違いすぎるよね」

「ちょっと踏んだらブチュ、だもんねえ。大事な大事な、肉ボール様が」

少女らの目は、泡を吹き痙攣するバンダナに集中していた。

その隙に、礼二はスマホをいじる。

礼二にはちゃんと仲間がいる。学校のヤンキーたちだ。ナンパの手伝いをしたり、引っ掛けた女を紹介することで重宝がられている。

——こういう暴力沙汰でこそ、奴らの真価が発揮される。俺に恩を売る機会だ、逃すわけねえ。というか、普通に友達でもあるし、絶対助けてくれる。……早く連絡したかった。でも、下手にスマホだせば取り上げられて終わりだ。チャンスが来ることを願ってたが、まんまと来た……助かる、絶対助かる！

無料アプリで連絡した。

正直「友情とか信じらんねー」というような感覚で生きてきた。普段はいい顔をして、いざとなったら逃げるんじゃないか、とも思ってきた。

絶対助けてくれる、などと上辺で思うのは一種の自己暗示だ。

本気で信じ込んでいたわけではない。

その礼二のスマホが振動する。

——あ、返事が……

画面にメッセージ。

すぐ助けに行くという力強い返事。

全身の力が抜けるのを感じる礼二。

涙がにじむ。

——ありがとう……

が、今実感した。

自分には友人がちゃんとして、ピンチにはちゃんと助けてくれるのだと。

漫画などなら、当たり前かもしれない。

だが現実ではどうか、とっていた。

自分自身、人を助けるほうではないので余計に思ってきた。

——俺、間違ってた……友情はある。芝、待ってろ。お前の無念、みんなで晴らすから。って、別に芝は俺の友人とは関係ないけど……ついでに晴らす。問題は、間に合うか。本当に来てくれる以上、あとは時間との勝負だ……

と、気づく。

周囲の女子たちが、去勢完了の余韻から冷め、新たな刺激を求めつつあることに。

「お、気づいた」

「残りの二個、気づいた」

「獲物、覚醒」

「まあ覚醒しても何の足しにもならないけどねー」

「おキャン玉、覚悟」

「ひ、いいいい」

腰を引く。

急所、肉玉、肉袋。

キュンキュンに縮み上がっている。

太ももの間が心なしかスースーするようで、心細い。

「さー、今度はあんたの番だよー」

「男らしく向かってきなよ」

「まあすぐ男じゃなくなるんだけどねー」

くい、と膝の間を開き、股間を無防備にする少女。

大して力を入れているつもりは無さそうだが、男から見たら引くぐらいの軽やかな音を立てて股間を叩く。

「ひっ」

「あは、ビビってるよこいつ」

「こんなもんでビビるの？」

囲む少女らが次々、自分のフラットな股間を叩く。

叩き、腰を引く。

「はうっ！ キ〇タマあああああ」

「一個だけは残してえええ」

「言う言う！　すぐ治るんだからどうでもいいでしょって！」

「まあ治らない時代の名残かな」

礼二を取り囲む少女たちが、「ここを集中攻撃する」と示すように、ゴリラが胸を叩いて威嚇するように、股間を叩いて嘲笑してくる。

膝を締め、とにかく時間を稼ぐ事だけを考える礼二。

体験版終わり

この後礼二の友人たちが駆けつけてきますが、当然のように金的集中攻撃で次々やられます。

さらに援軍が来て、勝ちそうになるも空手部主将がやってきて蹴散らされ、敗北。

来た男たち全員が玉責め去勢の運命をたどります。

続きは製品版でお楽しみください。